

書く意欲を高めるための「てびき」の必要性と活用 —大村はま氏の『旅の絵本』の実践を基に—

内 田 由香利

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2020年10月27日受付、2020年12月2日受理)

要 旨

大村はま氏の「てびき」を活用した『旅の絵本』の実践について考察しながら、書く活動における「てびき」の効果について考察したものである。大村氏の「てびき」は、子ども達が想像豊かに思考を広げながら楽しく書くことができるように工夫されていた。「てびき」により、絵本の挿絵を見る視点や作品の出来上がりのイメージが明確になり、子ども達は自由に書きたい内容を選択しながら想像豊かに書いていた。その考察を基に、写真を活用した書く活動における「てびき」を試案として作成してみた。この「てびき」の活用により、書く内容や書き方が想像でき、書く意欲が高まっていくのか、今後実践を通して検証していく必要がある。

はじめに 本研究の目的

前稿¹⁾では、書く意欲を高めるために、「言葉を創り出す」ための写真や絵の活用について考察した。書く為の取材段階で、児童の身の回りに多く存在する写真や絵を効果的に活用し、「写真や絵を読む」という視点を取り入れる。個人の考えや経験等の違いにより、絵や写真から創り出される文章は異なり、自由性もあるため、出来上がった作品を読み合う際の、面白味も増す。さらに、文章の内容を読み解き、書いてあることについて自分の考えを書くよりも容易であるため、児童の書くことへの抵抗も少ないという利点もある。「書く意欲を高める」という視点からは有効だと考察した。さらに、九州国語教育学会紀要²⁾において、写真の活用の仕方について、以下の3点で整理をした。

①写真の「事実」を伝える②撮影者の立場で、写真への「思い」を読み解く③写真から自由に想像する。

しかし、それぞれの指導の際に、教師が何も指示せず、「写真を見て、思ったことや感じたことを自由に書きましょう」といっても児童が自ら書き進めることができるわけではない。そこには、どの子どもも書き進めることができるようにするための適切な指導が必要である。そこで本研究では、大村はま氏の「てびき」について考察し、「書く」意欲を高めるための指導の在り方を探りたい。

1 大村はま氏の実践から考える

大村はま氏の実践に、「創作する力をつける」ことをねらい、「楽しく創る」という指導を絵本を活用して行った実践がある。大村氏は、『大村はま国語教室 6』作文学習指導の展開において「創造力」に言及し³⁾、創作の「力」というところに力を置きたいと述べている。そして、以下のように続ける。

どんな仕事についても、新しいものを生み出すエネルギーみたいなもの、その力と喜び、そういうものを知らなかったら、どんな仕事をしたってつまらないし、生きがいが無いと思いました。(P.6)

文章による創作から、子ども達の今後の生き方までも想像し言及しているところに大村氏の子ども達への愛を感じる。だからこそ「創作力」をつける必要があると訴える。さらに、その際必要なこととして「取材」についてこう述べている。

一つのテーマを持っていても、その取材がまずかった場合、これを、というものがなかった場合には、どんな筆力があっても、いい作品にはならないなと思いましたが、そこがいちばんたいへんな、みんなにできないところ。ですから、そのところは、私が手伝うことにしようと思ったのです。その前から作文の題材集めを、私もむきになってやらせたことがありますが、みんなが、作文が書けない、書けないという最大の原因は、書くことがないことでしょう。これが書きたい、ということがある場合、それをほんとうに書けないということは、珍しいと言えます。(P.6) (下線は筆者)

さらに、こうも述べている。

文章の構成ということも大切ですが、いくら構成を教えても、それだけでは書けるようにならない。やっぱり、これを、という内容の深いものを持ったとき初めて、構成というものが、その事柄自身のなかから生み出されてくるのだらうと思いました。これを、という書くこともないのに、構成のしかたなんて、いろいろ教えてもだめだと思ったのです。それでもう、いいものがないということについては、あまり気にしないことにしました。しかし、書き慣れさせて、書くことが億劫でなくて、心のなかをどんだん文字を使って書けるという、そのことはしておかなければならない、中学時代の作文学習の大事なことだと思ったのです。(P.8) (下線は筆者)

また、『『大村はま国語教室 5』書くことの計画と指導の方法』中学校国語カリキュラムにおける「書くこと」の指導⁴⁾において、

私は、書くことを指導する教師が自分の受けもっているわずかの間に、どういふ傑作が生まれたかということに最大の関心をもったり自分の指導の効果を見たりせずに、自分の指導した子どもたちが、生涯、どのくらい、書くことに苦しまず、更に書きたのしみを持っていくかということが、自分の指導の価値を決定するのだというような気持ちでいきたいと思います。(P.134)

この文章からは、書いた作品のみの目先のことにとらわれることなく、生涯を通して書くことを楽しむ子どもを育てたいという、やはり子どもの将来を見通した温かい思いが詰まっており、教師としてのあるべき姿(見習うべき姿)を確認することができる。

これらの言葉は大村氏が中学生への作文指導に関して言及したものであるが、40年以上前の中学生の実態は、現代の小学校高学年の児童にも当てはまると考える。そこで、大村氏の実践を基に、どのようにして「書きたいこと」をもたせ、そこに「てびき」等を活用してどのように指導を加えることで、主体的に「書く」活動へと導いていくことができるのかについて考察していきたい。

1-1 楽しくつくる「旅の絵本」の実践より

大村氏の実践に、『旅の絵本』によって書く⁵⁾がある。この実践の前には、昭和50年10月実践として、「楽しくつくる『白銀の馬』という実践、「灯台とハマナデシコ(千川あゆ子作)」「りんごがたべたいねずみくん」(なかえよしを作、上野紀子絵)「クリちゃん」(根本進作)「空中ブランコのりのキキ」(別役実作)等の絵や4コマ漫画を使った実践が紹介(その中で「てびき」を活用した指導が積み重ねられている)されている為、この『旅の絵本』の実践のみを取り上げても、「書く」活動のための「てびき」の効果は探ることができないだろう。しかし、前出の写真の活用方法「③写真から自由に想像する」指導法にも生かされる部分があると考えため、この実践を取り上げながら「てびき」の効果について考察したい。

安野光雅の『旅の絵本』(1977)⁶⁾は、現在も版を重ね息長く読み継がれている絵本であり、旅の舞台を変えてシリーズ化もされている。絵本であるが、保育園、幼稚園、小学校ばかりか中学校の図書室にまで置かれていることも多い。また、子どもと一緒に絵本を楽しむ親たちや、昔読んだ絵本の続編を大人になってから手に取る人たちなど、幅広い年齢層の人たちに愛読されている。基本的にどのシリーズも絵本の構成が共通している。絵本に文字(文章)はなく、三角帽子を被った一人の旅人らしき男性が登場する。馬に乗ってたぶん北歐であろう土地の村から町へ、町から村へと様々な土地を通過していくという設定である。そこには、豊かな自然とたくさんの人々の営みが描かれている。大村氏は、この絵本について以下のように述べている⁵⁾。

そこには、人間の生活があった。人々の会話が聞こえた。もう一枚、もう一枚とめくっていくにつれ、ますます、さまざまな人、庶民の生活が開けてくる。(P.113)

子ども達が自由に想像する際に、人々の姿があることで、自分の生活を重ね合わせたり、自分の経験と結び付けたりしながら豊かに想像することができるということであろうか。自由に想像しながら文章を書く際に取り上げる絵や写真の一つの条件になるだろう。

この実践の「てびき」(〈てびき〉プリント)と書かれている)は以下のようなものである。

〈「てびき」プリント〉

『旅の絵本』によって書く

一さあ どんな形で ヒント

一、旅日記 旅の記録

二、旅だよりその日その日 日々の手紙

三、子ども（弟、妹、だれときめず、幼い子ども）に語ることば（見せながら）

四、人生断片 ここにある人生

訪問 労働 誕生 というふうにとらえて

五、ここにも人の生活が

働く 笑う 走る うたう 逃げる というように動詞でとらえて

六、心から心へ ひびきあうことば

吹き出しをつける

七、「ここに人間がいる」と始まる詩 各ページごとに。

「ここに人間が生活している」と始まる詩 〃

八、「ぼくは馬に乗って、人生をさがしに行った。（出た）」創作

九、絵のなかのどの人かになって書く。いろいろのひとになる。

一〇、もし加えるなら 私はこの一ページを

私の加えたい一ページ

注目したいのは、「一さあ どんな形で」の「一さあ」である。「てびき」というと、書き方を順に示すだけの手順書のようなイメージをもつこともあるが、この一文があることで、教師自身の笑顔が思い浮かぶ。「さあ、書きましょう。書くことを楽しみましょう。」という教師自身の意気込みも感じられ、「さあ、書く内容をあれでもよいこれでもよいと、出来上がりの作品をイメージしましょう。そして、イメージがもてたら楽しく書き進めましょう」と言われているような感じを受ける。「ヒント」という言葉からは、「先生がヒントを示すから、それも参考にしながら自由に想像し、これから書くことを決めていきましょうね。」と優しく言われているようにも感じる。大村氏のほかの「てびき」を見てみると、いつもこのようなものが書かれているわけではないようである。この実践は、「白銀の馬」の実践が成功した後に、字のない絵本を探し続けていた際に見つけた絵本を使ったものであるらしい。習慣となっている週に一回の書店への来店でたまたま手に取り、「胸がどきどきし、息づかいがあらくなってくるのが自分でわかった」と述べている。さらに「よし、これで、と思うとうれしくて、思わず本を抱きしめて帰った」と自身が記しているように、実践への気持ちの高まりが尋常ではなかったため、この「てびき」では、初めにそう記したのかもしれない。「一気に「てびき」を書いた」とあることから、教師の実践への意欲の高まりが感じられる。ここで確認したいのは、子どもの実態に合わせ教材を探し求める姿勢である。教師にそのような姿勢（さらに、それをどう教材化して、実際にどのように指導を進めるかを子どもの立場に立って考える姿勢）がなければ、子ども達が主体的に書くようにはならないということである。教師自身の学び続ける姿勢や教えることへの情熱については、現代でも教師に必要とされる資質能力として挙げられるが、まさに教師としての根本の部分であるように強く感じる。そもそもそれがなければ、子ども学ぶ意欲を高めることはもちろん様々な能力を身に付けさせることもできないということだろう。

次に、実際の「てびき」の内容を詳細にみていく。一、二は、文章の形式（日記、記録、手紙等）を書いてみたいことと照らし合わせながら選択できるようにしている。これが「てびき」の最初にあることで、自分がこれから書く文章のおおよそのイメージを想像することができるであろう。日記や記録なら、自分自身で感じ取ことを書き留めるイメージをもつだろう。手紙なら、だれに対して…？と、相手意識をもつことができる。この旅の絵本を見ながら子どもは誰に対してどんな手紙を書こうとするだろうか。実際に旅人になり馬に乗って旅をしているつもりで、見た風景や感じ取ことを伝えたい人に伝える文章を書こうとするだろ

うか。家族だったり、親しい人だったりすれば、「今度は一緒に旅行に行きたいですね。」と誘うような文章になるかもしれない。文章の形式を考えるだけでも、子どもの思考が広がることが容易に想像できる。三では、相手意識をもつことができる。書く意欲を高めるために、相手・目的意識を明確にすることの必要性が認識されているため、その意識をもたせるように「てびき」を作成することが重要なのであろう。「弟や妹、幼い子ども」を対象にすれば、おのずから簡単な言葉を使わなければならないことが確認できるし、(見せながら)という部分からは、絵を見せながら語りかけたり問いかけたりする文章をイメージすることもできる。さらに、「だれときめず」という選択肢からは、もっと高尚な(例えば描写的な文章)にしてみたい場合にも対応できる。相手が誰とは決めず、その場面から想像できるイメージ(五感を使って感じたり、そこから湧く感情を表現したり)を自由に書き進めることもできるだろう。四では、「人生断片 ここにある人生」と記している。これを読んだとき、子どもは「どんな人生が描かれているのだろう」という視点でこの絵本を眺めるだろう。「訪問 労働 誕生 というふうにとらえて」という記述からは、「訪問」「労働」「誕生」の場面を探そうとページをめくるのではないだろうか。その語彙にあった場面を探したとすれば、さらにそこから読み取れる人々の「人生」について思考を深めるだろう。大村氏自身も、この本を選択した理由として、絵から人間の生活、会話が想像できたからであることを明かしていることから、そのような視点をもたせながら絵本を眺めさせたいという思いが読み取れる。五では、「ここにも人の生活が」と記し、「働く 笑う 走る うたう 逃げる というように動詞でとらえて」と続ける。動詞の視点で捉えると、絵の中の人々の動きが見えてくるのではないか。絵本は静止画だが、想像することで動画に変わり、人々が動き出すかもしれない。そうすれば、さらに言葉が生み出されることを予想したのであろう。六では、「心から心へひびきあうことば」として「吹き出しをつける」とある。吹き出しをつけることは、人々の中に会話が生まれるということである。想像することで会話はさらに広がる。小学生の学習でも、場面の様子や登場人物の気持ちを想像させる時にはよく吹き出しを活用する。文章を書くことが苦手だという子どもも吹き出しなら容易につけることができるだろう。七では、「ここに人間がいる」「ここに人間が生活している」という言葉が添えられ、それで始まる詩を作ることも示唆されている。とりあえず書くページを決め、「ここに人間がいる」と始め、その後どんな人間がいるのか、何をしているのかについて、「てびき」のほかの項目を見ながら書き進めることも可能であろう。そして、さらにページをめくり「ここに人間がいる」と繰り返す。その繰り返して書き進める方法もあるということを示したものであろう。八は、「ぼくは馬に乗って、人生をさがしに行った。(出た)」と創作してみるのはどうですか?と、提案している。つまり旅人の視点に立って、どこへ行き、何が見え、誰と会話し、どんな思いをもつだろうと想像できるようにした項目だろう。九は、まず「絵のなかのどの人かになって書く。」と書いている。この絵本は、同一人物が複数のページに出てくることがある。つまり、ページをめくるごとに動きがあり、していることが変化している。それをたどることで、その人物についてのストーリーができる場合もある。そのような視点で書くこともできることを示したものであろうか。「いろいろのひとになる」ともあり、絵を眺めて、色々な人を追いながら、色々な生活を想像してみましようということなのであろう。一〇では、「もし加えるなら 私はこの一ページを 私の加えたい一ページ」と示し、新たなページを加えてもよいことを提示している。最後のページの後に続きの物語を想像する場合もあるだろう。また、途中に挿入する場合もあるかもしれない。自由に旅人や出てきた人物を選択し、その視点で物語を書き進めることも可能になるだろう。あるいは、突然想像できない方向に場面が展開しても面白いかもしれない。教師自身が、子どもの立場に立って、書くことに困らないように、ヒントを与えることで、「書くこと」への意欲が増し、少なくとも「書くことがない」という子どもは、出てこないだろう。

以下は、この「てびき」を活用して書いた生徒の作品である。(下線は、「てびき」が生活していると筆者が感じた表現)

題名「遠い旅の記録」(「てびき」一)

池田美和

(1) 三枚目の絵につけて。

小鳥が愛を語らう山の中

ここに 人間がいる

(「てびき」七)

カーン カーン

快い響きをたてて

木こりが木を切る

橋の近くでは

荷車をとめ

それに木をつんでいる

川では

子どもがヨットを流し お母さんがせんたくをする (「てびき」四、五)

どこかで 誰かが 麦を刈る まきを割る 乳をしぼる (「てびき」五)

みんな与えられた仕事

「オーイ たおれるぞー!」(「てびき」六)

木こりがそう叫んだら ひと休みして お茶を飲もう (「てびき」九)

「あー この希望に満ちたところ 今年も豊作じゃのう」

「もうひといきしたら休憩よ あの人も 三本目が切り終わるころ……」

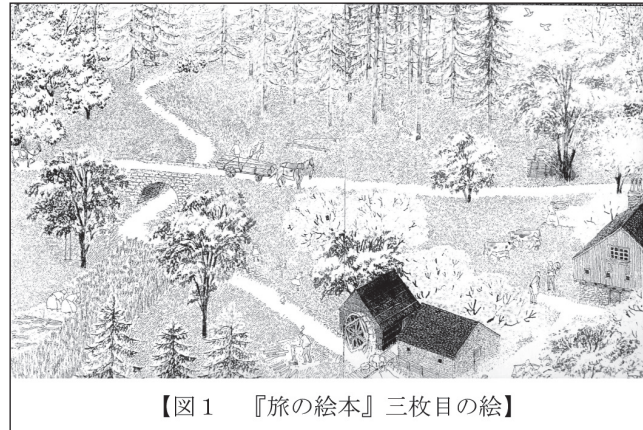
と 麦を刈り終わるころ

「あの木が 切れたら しばらくたてのミルクでも……」(「てびき」六)

と 乳をしぼる人

カーン カーン

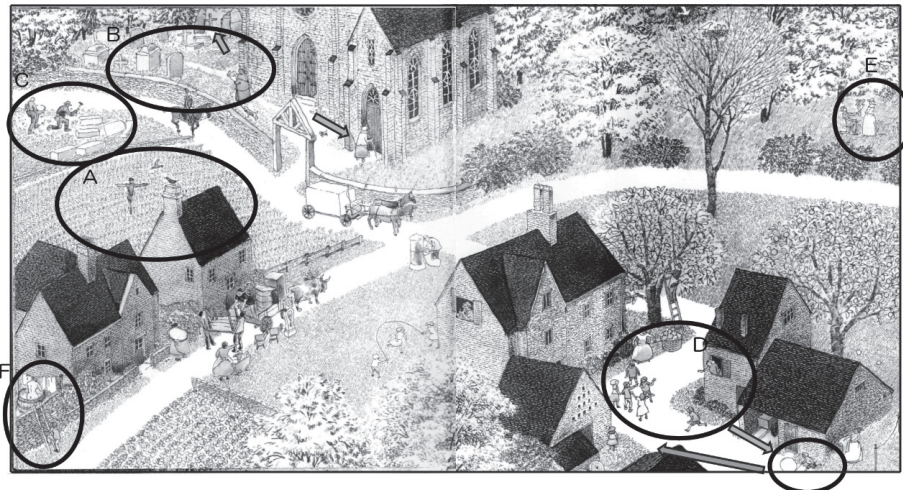
もうすぐあの木も切れるだろ (p.121)



【図1 『旅の絵本』三枚目の絵】

この生徒は、まず、この絵を見て「小鳥が愛を語らう山の中」と場面設定をして、全体の様子を描写している。視点は挿絵全体に散らばっている。「てびき」を活用しているであろうと予想される箇所は()の通りである。後半は、人々の様子から想像した会話を「」で挿入しながら、そこに見られる人々の暮らしについて自由に想像している。カーン カーンと木こりが鳴らす斧の音が、快い響きとして文章の初めと終わりに鳴り響く。文章の構成も工夫しながら記述していることが読み取れる。続けて、五枚目の絵で以下のように綴っている。

(2) 五枚目の絵につけて。



【図2 『旅の絵本』五枚目の絵】

視点がどう移り（以下の生徒作品で<>にて提示）、絵からどのようなことを想像し、「てびき」を基にどのように文章を綴っているのかみていく。

ふもとの村ではまだ刈り入れが終わっていない、黄色い穂が波うっている。カラスがものほしそうにねらっている< Aの部分>

ここにも人間がいる（「てびき」七）

教会の墓地にはいつも数人の人がおとずれる

ホラ 今日も花束をかかえて門をくぐる人がいる

「おじいさん 今朝はとても寒いですね」そう十字架に語りかける

おばあさんの背中が淋しそう 若かったころの自分たちを そっと

思い出しているようだった< Bの部分>

墓地の前で 墓石をほる人が言った

「毎度のことながら この仕事はやだね いつも誰かの死と 誰かの悲しみと
むかいあわせだ」と……< Cの部分>

「ワーイ ワーイ」

りんごの木の下で 子どもたちがさわいでいた

木の枝には 実がひとつ あとは みんなかごの中

「こらこら、さわぐんじゃないよ ならんでならんで……」

かごの前では おばあさんが でんとかまえる

「ワーイ！」一歩おくれた男の子 早く行かなきゃ

輪まわしをしていた子も とんできた

「さあならんで ならんで……」

でも 何もいえずに建物のかげから そっとのぞいている子もいる

内気な女の子 お嬢さん 早く行かないともらいそこねるよ

「順番よ……」< Dの部分>

「どうぞ私と結婚してください」 若者はあおい木の下で 女性に花束をささげる

けれど女性は ツンとすまして立っている< Eの部分> かたや

「今日こそはイエスと言わせよう」とはしごを使ってへいをのぼる人がいる

あっ いけない 今は入ってはいけない

女性は中で行水をしているんだ< Fの部分> (P.122)

(後略)

三枚目の絵では、細かに「てびき」を参考にしながら書き進める様子がうかがえた。しかし、五枚目の絵になると、AからFまで絵本全体に視点を動かしながら、描写されている事実から想像豊かに（太字部分）を書き進めているようだ。そこには人々の生活があり、会話の中にも様々な人柄さえ描かれている感じを受ける。おそらく「てびき」を何度も読み返しながら書き進めたであろう三枚目の絵と比べると、絵を眺めながら物語を創ることを楽しんでいる感じがする。

この生徒は「あとがき」で以下のように振り返る。

はじめに、絵本を手にしたとき、どのようなかたちにするかなど、さっぱりわからなかった。

「てびき」を見ながら「子どもに語りかける」にしようか、「詩」のかたちにしようか、それとも「旅の記

録」にしようか、となやんだ。その結果は「旅の記録を第三者の目から見ると」ということにした。(P.122)

この「あとがき」からは、「てびき」を手元に置きあれこれ悩んだ末「旅の記録」を書くことに決定したこと、更に書いたものからは、「てびき」を活用した箇所が見て取れる。

次の生徒作品は、「てびき」の五、「ここにも人の生活が 働く 笑う 走る うたう 逃げる というように動詞でとらえて」が生かされている。

「動きのフレーズ」

小町谷昌宏

(この絵本の中からたくさんの動詞を拾い上げ、それぞれの動詞に短いことばを添えたもの)

……

……

ゆれる

小さな池に風がそよぐ。

そのたんびに、ガマのほが、ゆらゆらゆれる。(八枚目の絵から)

つながれる

一匹のヤギが気につながれている。

すごくじれったそうな顔つきで自由になるのを待っている。(一〇枚目の絵から)

流れる

川を小さなおもちゃのヨットが流れていく。

川上でだれが流したのだろう。ゆったり流れるヨット。(三枚目の絵から)

飛ぶ

あらふしぎ！手品師の帽子から飛び立つ三羽のハト。

空高く飛んでいくハト。

染まる

西の空がまっかに染まった。ぱたぱたと巣に帰る鳥。とてもきれいな夕やけだ。

あしたはなにがあるのだろう。(二一枚目の絵から) (P.124)

ページをめくり、絵をただぼんやり眺めるのではなく、例えば「動きを見つけよう」という絵を見る視点をもつための「てびき」を作成することで、絵からさまざまな動きを見つけ出す楽しさを味わうことができる。大村氏は、自分自身も絵本を楽しみながら、子どもの立場に立ち、実際に書き綴る文章を考えていたのである。だからこそ、子どもが頼ることができる「てびき」になったに違いない。

この生徒は、「あとがき」で以下のように記している。

「きれいな本だな。」

初めて「旅の絵本」を手にしたとき、ぼくはただそれだけしか思わなかった。しかし、一ページまた一ページとめくっていくうちに、次第にこの本のすばらしさがわかってきた。ページの中には、よろこびがあり、かなしみがある。動きのある生活がある。立体のからくりがある。しかも、みんな細かい線で、生き生きとえがかれている。(中略)

ところで、この作品をどのような内容にするか、まずそこから決めなければならない。そこで、「てびき」のヒントの中から、自分にあつたものを三つほどえらび出してみた。(P.124)

この生徒は、初めはきれいな本だと絵を眺めるだけだったようだ。しかし、この絵本から言葉を創り出し、自分の作品を創るという目標に立ち返り、「てびき」を参考に三パターンを考えたことがわかる。もし「てびき」がなかったら、自分の発想を広げながら考えることは難しいのではないか。また、逆に「てびき」で単に書く手順を示すだけでなく、発想豊かにあれこれ考えることができるようにヒントを与えているからこ

そ、個性溢れた作品が創り出されるのだろう。「手紙を書きましょう」「記録を書きましょう」「続き話を書きましょう」等、作品の形式等も限定しないからこそ、「私はこれを書きたい」という個々の欲求も生かされ、書く意欲に満ちた多くの作品が生み出されるのではないか。

1-2 荻谷夏子氏が感じた「てびき」の価値

大村氏の教え子である荻谷夏子氏は、大村はま記念国語教育の会の会報⁹⁾の中で、大村氏の「てびき」についてこう述べている。(下線は、筆者)

「てびき」は、大村先生が最後に後輩に手渡したいと願っていたもの。大村国語教室の軸であった。

1,大村はまにとって「てびき」とは

「てびき」とは文字通り、こっちへ来てごらん、と手をとって引くこと。「そのつど、そのときのためだけ。どんな時でも使える万能の「てびき」などは考えられない。」「「てびき」を作るのは、あの子に、この子に、と考えれば簡単だった。」「なまなましいところをわからせることが大事。」

と述べている。

国語教室の軸とは、「中心となるもの、要である」。つまり、実践の中心となるなくてはならないものである。「その都度その時の為だけに作る」「子どもの実態に合わせ、どの程度の子どものこともイメージしながら作る」ことは、教師の立場からすると手間のかかる仕事である。しかし、色々な子どもが発想豊かに書くことに没頭することができる姿を想像しながら作成することに大村氏は喜びを感じていたのだろう。そのような教師の姿があったからこそ、子どもの書く意欲は高まり、書く能力も身につけていったことは間違いない。

さらに、その目的として以下の点を挙げている。

2,大村はまの「てびき」の諸相としては、《目的に注目して》

- ①単純に手順を示す指示を与える。
- ②一人前の大人になるためのさまざまな力と知恵を、具体的場で手渡していく。課題にどこから着手するか、計画、手順、協力のしかた・・・
- ③ことばで考える人を育てるための働きかけ。ことばの空回りを阻止する。
- ④子どもが自力では引き出せないものへの戸口を示す。気づいていない価値そのものを示す。
- ⑤そういう世界もあるのか、と目を開かせる。

現在「てびき」と称しているものは、大半が上記①である。しかし、大村氏は学ぼうとする目の前の子どもが迷わないよう、そればかりか楽しむような、そして個々の考えが十分に引き出されるように考えて作成したと考えられる。②からは、今日の前の授業を成功させるというより、日々の学習の過程が大人になったときに必要な力の育成につながるようにと、遠くまで温かいまなざしを送りながら「てびき」を準備していたのだろうと想像できる。③からは、言葉で考えるように導いたり、本当に適切な言葉を使いながら表現したいことを書き表したりすることができるようにという思いが溢れている。④や⑤からは、特に子どもの視野を広げ、見方や考え方を広げることにも力を注いでいたのかと。教師として多くの子どもの前に立つ時、「てびき」の効果を最大限に生かすためには、その多彩さは必然だったのであろう。教え子であった荻谷夏子氏は、「てびき」を貫く重要な視線として、以下のようにまとめている。

- ①単純な命令形でなく、子どもの思考に添い、考えを起動させることを目指した。日々繰り返される平凡な命令形や質問が、すでに教室での「着火力」を失っていることを軽視しないということ。
- ②気がつくと自然に目標に到達できるような「てびき」の仕方。幼い頃のはまに母が「裾を持ちなさい」と言ったようなあり方。
- ③教師がその時々手作り「てびき」を示すことで、目の前の仕事に自力で対処していくために有効な道がたいへん素朴に示された。素朴な手作り感と優れた知力の融合。
- ④実らない種は省く手助けをした。レベルの高い学習が多かった教室で、安心と信頼のもとになってい

たのが、「てびき」だった。

子どもの思考に添い、自然に目標に到達できるような、素朴な手作り感のある「てびき」。それがあれば安心して学習に取り組むことができる信頼できる「てびき」。しかし、それを作成するためには優れた知力が必要である。昨今の授業において、このようなレベルの高い「てびき」が作成されることは少ない。しかし、このような「てびき」の価値を再認識し、授業において活用できないかと考える。

2 写真を活用した実践

2-1 写真を活用した書く活動

筆者は子ども達の「書く意欲」を高めるために、写真を活用できないかと考えている。国語科の「書く」指導において写真や絵を活用することは、文章を読解した上で自分の考えを創り出すことには抵抗のある児童も、比較的抵抗なく取り組むことができるため、「書く」ことへの意欲づけには効果的であるといえる。写真や絵を活用した書く活動については、①写真の事実を伝える②撮影者の立場で、写真への「思い」を読み解く③写真から自由に想像する、

という三観点で整理した。写真の内容については様々であるが、そこに人物が写っていることで、その人物像から様々な生活が想像できる。そのため想像豊かに書く活動を設定したときには、人物の写真がよいと考えている。今回は図3のような子どもの写真を取り上げ、その活用について考えてみたい。提示した写真では、どのような「書く活動」が設定できるだろうか。小学校高学年における実践を仮定し、「写真や絵を活用して、書きたいことをもつ（取材）」「書き慣れる（記述）」ことをねらいとして考えてみたい。



A



B

【図3 子どもの写真】

図3は、親が撮影した子どもの写真である。まず、Aの写真について考えてみる。①の観点、「写真の事実を伝える」では、写真の構図が単純すぎて、「3歳ぐらいの子どもが木のところをのぞき込んでいる。髪を結び黒っぽいパンツをはいた女の子である。向こうには店が写っている。」程度で終わってしまうだろう。②の観点、「撮影者の立場で、写真への『思い』を読み解く」で書く活動を設定すれば、写真は誰がどのような思いで撮ったのかを考えさせ、題名をつけたり、写真の解説を書いたりできるかもしれない。③の観点、「写真から自由に想像する」ならば、「ここはどこか」「子どもは何を見ているのか」「木の向こうには誰がいるのか」「どんな表情か」「それはなぜか」「これから、この子どもは何をするのか（どこへ行くのか）」等、想像しながら書き進めることはできるだろう。次に、Bの写真の場合はどうだろうか。子どもが写真を撮っている様子を逆に親が撮影した写真である。この写真の場合も、③「写真から自由に想像する」ならば、「子どもは何の写真撮っているのか」「どんなことを言いながら撮っているのだろうか」「どうしてこんな表情なのか」「つま先立ちしているのはなぜか」「これから、この子どもはどんな表情に変わるだろうか」等を想像しながら書き進めることができるだろう。『旅の絵本』のように、多くのページを眺め、自分で好きなページを選択しながら書く場合と異なり、写真が限定されている為、初めは意欲的にならないかもしれない。ただ、書き進めているうちに想像が広がり、楽しくなりどんどん書き進める場合も多い。では、「写真から自由に想像して書く」という活動を設定したとして、以上のような視点をもって書き進めるための「てびき」

というものはどのようなものになるか、実際の書く場面を想定し考えてみたい。

2-2 書く活動における「てびき」の試案

<p>Aの写真〈「てびき」 プリント〉 「写真を見ながら書く」に挑戦！ —さあ いろいろなことを想像してみましょう！</p> <p>一、写真から物語を創りましょう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この子どもは、何歳でしょう。 ・木の向こうにいるのは誰でしょう。 ・<u>どんな表情をしていますか。</u> ・この後、何をするのでしょう。 <p>(どこへ行くのでしょう。)</p> <p>二、写真の解説をしてみましょう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・題名は何にしますか。 ・その題名にした理由は何ですか。 ・撮影者はどんな気持ちで写真を撮ったのでしょう。 ・子どもに吹き出しをつけてみましょう。 <p>三、命、成長というまなざしで見ると…</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の幼い頃の思い出で、思い出したことはありますか。 ・好きだったこと、得意だったことがありましたか。 <p>四、誰に対して、何のために書くのか…</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達、家族、地域の人に ・共感してもらおう、味わってもらおう、楽しんでもらう 	<p>Bの写真〈「てびき」 プリント〉 「写真を見ながら書く」に挑戦！ —さあ いろいろなことを想像してみましょう！</p> <p>一、写真から物語を創りましょう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この子どもは、何歳でしょう。 ・<u>何の写真を撮っているのでしょうか。</u> ・この後、何をするのでしょう。 <p>二、写真の解説をしてみましょう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・題名は何にしますか。 ・その題名にした理由は何ですか。 ・撮影者はどんな気持ちで写真を撮ったのでしょう。 ・子どもに吹き出しをつけてみましょう。 <p>三、命、成長というまなざしで見ると…</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の幼い頃の思い出で、思い出したことはありますか。 ・好きだったこと、得意だったことがありましたか。 <p>四、もし私が撮るならこんな写真を</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな写真を撮りますか。 ・なぜそのような写真を撮りますか。 <p>五、誰に対して、何のために書くのか…</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達、家族、地域の人に ・共感してもらおう、味わってもらおう、楽しんでもらう
---	--

大村氏の「旅の絵本」の実践を参考にしながら、「てびき」を作成してみた（下線はA B独自の記述）。前出の②③の観点から、「てびき」一、二では「写真を見て自由に想像する」「撮影者の立場に立って」というどちらかを選択できるようにした。しかし、小学生の場合（特に書くことが苦手な子どもの場合）、一について、これを見ながら書いていくと、文章がこの順番で書き進められ、型にはまった面白味のない文章になってしまうのではないかと思う。そこでまず、この「てびき」を参考に、写真を見ながら色々なことを想像させたい。自分の考えを持たせることで（できれば小学生の場合は、話し合いによって友達の考えにも触れる機会を設定することで）、書きたいことが思い浮かび、書く意欲が高まるのではないだろうか。三では、子どもの姿から思い出す自身の幼い頃を想像させ、その思い出（写っている子のように遊んでいたことや楽しんでいたことなど）を付け加えるとオリジナリティが加わるだろう。Bの写真では、さらに何の写真を撮っているのかを想像させることで、書く内容が広がるのではないかと考えた。このように、教師自身が実際に写真から想像し、それらを引き出すことができるように、自然に子どもに問いかける文章で「てびき」を作成していけばよいのではないかと考える。

大村氏の多くの実践から、「てびき」の有効性については明確であるが、「てびき」の内容をどう整理すればよいかについては、実践において検証する必要があるだろう。さらに、大村氏の場合、「てびき」の活用には

その積み重ねがある。「話す・聞く」「読む」「書く」のすべての領域で、また、年間を通して「てびき」を使用した実践が積み重ねられているからこそ、その有効性も高まるのである。教育は日々の実践の積み重ねである。今後は、目標や指導計画等も含め詳細を明示した授業提案を行い、実践を通して研究を深めたい。

<引用文献>

- 1) 内田由香利 「「書く」意欲を高める国語科指導に関する一考察 - 「言葉を創り出す」ための写真や絵の活用-」『九州女子大学紀要 第56巻2号』(2019)
- 2) 内田由香利 「「書く」意欲を高める写真の活用に関する一考察 - 「書く力」の調査結果を基に-」『九州国語教育学会紀要 第9号』(2020)
- 3) 大村はま 『大村はま国語教室 6』(1991) 筑摩書房 p.5
- 4) 大村はま 『大村はま国語教室 5』(1991) 筑摩書房 p.134
- 5) 大村はま 『大村はま国語教室 6』(1991) 筑摩書房 p.113
- 6) 安野光雅 『旅の絵本』(1977) 福音館書店
- 7) 大村はま 『大村はま国語教室 6』(1991) 筑摩書房 p.113
- 8) 大村はま 『大村はま国語教室 6』(1991) 筑摩書房 p.119
- 9) 大村はま記念国語教育の会 『会報 はまかぜ 第28号』(2015)

The necessity of “Tebiki” to raise the children’s will to write — Based on Ms. Hama Omura’s class using “ Travel Picture Book ” —

Yukari UCHIDA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women’s University
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

In this paper the author considered the effectiveness of “Ms. Hama Omura’s “Tebiki” in the class of using “Travel Picture Book”. In her class children wrote what they wanted to write happily and creatively. Because “Tebiki” played a very important role to help children write effectively. For example, it could give them hints to summarize their ideas or how to write easily. Through analyzing and considering the effectiveness of “Tebiki” in writing activities, the author recognized the possibility to raise children’s will to write. Based on that consideration, the author attempted to create a new “Tebiki” in the writing activity using photographs. It is necessary to verify through practice in the future whether the content and writing style can be imagined and the motivation to write will increase by utilizing this Tebiki.

Keywords : Will to write, Tebiki , Imagination , Utilization of photos